2. 寄稿:6 年ぶりの香港で考えたこと

（元鎌倉市文化担当課長・大河ドラマ担当、県立湘南高等学校臨時任用教諭 石川 雅之）

旧聞報告となり恐縮だが、今年の年始、およそ 6 年ぶりに香港の地を踏んだ。

私にとって初めての香港は、まだ 30 代の頃だったから、今から約 40 年も前のことになる。当時はまだ英国領であり、何よりも「円」が圧倒的に強い時代だった。香港の物価も今とは比べ物にならないほど安く、若気の至りもあって、アルマーニの吊るしのスーツを購入してはしゃいでいた記憶が鮮明に蘇る。当時の街並みは、通り沿いの頭上へ競い合うように極彩色の巨大な看板が突き出し、それぞれの店が強烈にその存在をアピールしていた。多くの料理に容赦なく添えられていたパクチーの匂いも強烈で、一口目は恐る恐る口に運んだのも懐かしい思い出である。街全体に混沌とした賑わいと、溢れんばかりの勢いがあった。これこそが、沢木耕太郎が名著『深夜特急』で我々に熱っぽく伝えた香港なのだと、若き日の私は心を激しく湧き立たせたものだった。

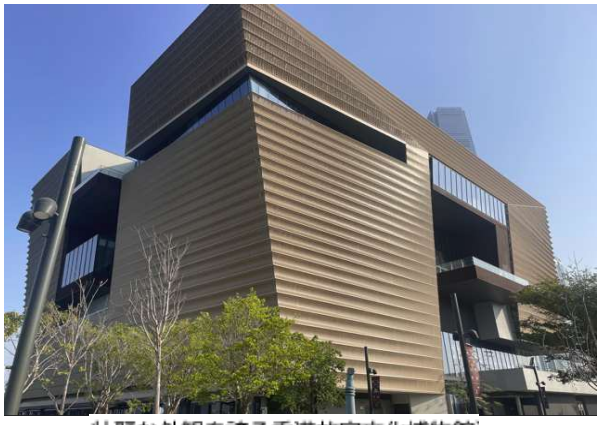
その後、1997 年の返還前に一度、返還後に二度訪れ、今回で 5 度目の訪問となる。今回の旅の主な目的は、近年めざましい開発が進む九龍の「西九文化区（ウエスト九龍文化地区）」の見聞と、すっかり綺麗に整備されているはずの九龍湾沿いの遊歩道「星光大道（アベニュー・オブ・スターズ）」の散策であった。宿舎には、交通の便が良い尖沙咀のザ・ロイヤル・パシフィック・ホテル＆タワーズを選んだ。

チェックインを済ませた後、まずは地下鉄で油麻地まで移動し、老舗の「興記菜館」で名物の土鍋ご飯を食べて夕食とした。帰路は地下鉄三駅分にあたる道のりを、街中を散策しながら徒歩でホテルまで戻ることにした。6 年前の面影を残す場所も散見されたものの、街の様子は劇的に変わっていた。きらびやかなブランド店がひしめき合い、観光客の数は以前にも増して圧倒的だった。そもそも、香港国際空港での入国審査からしてかなりの時間を要し、以前はここまで混雑していなかったはずだと、時代の変化を肌で感じることとなった。

一夜明けて二日目、早朝に宿舎を出て佐敦道まで朝散歩を楽しみ、目に留まった地元の店で熱々の朝粥をいただくことから一日を開始した。この日は、今回の旅の主目的である、九龍で今なお大規模な開発が続く西九文化区の散策が午前中の予定である。

この巨大な文化地区の整備には、スターフェリー発着場周辺の混雑緩和を目的とした、いわゆるオーバーツーリズム対策も視野に入っているのだろう。しかしそれ以上に、ここ数年間における中央政府の支配力強化という政治的な意図を、「文化」という美しく洗練されたベールで包み込むことで、さりげなく融和させようとする思惑が明白に見て取れた。最終的な完成形の情報を私は持ち合わせていないが、ここには驚くべき規模の文化ゾーンが形成されつつある。現在すでに開館しているコンテンポラリーアート特化型の美術館「M+」や「香港故宮文化博物館」の圧倒的な存在感は、今さら付言するまでもない。そればかりか、西九文化区の入り口にあたる角地に聳え立つ芸術劇場の壮麗な佇まいからしても、やがてすべてが整ったときに現れるであろうスケールの豪壮さ、もはやこちらの想像を絶するものになるはずだ。向こう 100 年は超大国として世界に君臨し続けるであろう中国の、細部を顧みない強権ぶりと圧倒的な巨大さには、ただただ溜息を漏らすほかなかった。北京の本館とどのように展示の棲み分けを図っているのかは詳らかではないが、香港

故宮文化博物館に並ぶ展示品の数々は、精緻・微細にして華麗、精度高く雄渾そのものであり、その美しさの前には言葉を失うばかりであった。


壮麗な外観を誇る香港故宮文化博物館


近代建築の粋を集め、圧倒されるばかりの「M+」

国家の威信をかけた巨大建築に圧倒され、呆然とさせられながら昼食を摂り、一度宿舎に戻って息を整えた。午後は九龍湾沿いの星光大道へと向かった。そこは文字通り「芋を洗うような」観光客の雑踏で溢れかえっており、その熱気に呑み込まれながらも、往年の香港映画スターの手形に自分の手を重ねてみたり、以前から変わらぬ佇まいで佇むブルース・リーの銅像を背景に記念撮影をしたりして、観光客としてのひとときを楽しんだ。


ヴィクトリア・ハーバーを背景に立つ
ブルース・リー像と星光大道


星光大道にて、映画スターの
手形に自らの手を重ねて

三日目は、対岸の香港島散策に充てた。尖沙咀での朝散歩の後、地下鉄で中環（セントラル）へ移動。そこから上環にある文武廟まで坂道を歩いて登り、参詣した。高層ビルの狭間にひっそりと佇むこの古刹は、日曜日ということもあってか、朝早くから熱心に線香を捧げて祈る人々の姿が非常に印象深く心に残った。

参拝後、周辺の人気店にできる長い行列を横目に、いくつかの老舗で土産物の購入を済ませて昼食をとった。中環の名所であるミッド・レベルズ・エスカレーターの周辺では、香取慎吾氏が描いた鮮やかな壁画アートの前でポーズを取ってみたり、往年の名画『恋する惑星』の登場人物よろしく、腰をかがめてアパートの部屋を覗き込むような仕草に興じてみたりしながら、現在は観光スポットとして再生されている監獄跡の歴史的建造物「大館（タイクン）」をひと巡りした。広大かつ堅牢な

その施設は私にとって初見参であったが、見学料を徴収することもなく、これほど広大な施設を維持・運用している香港当局、ひいてはその背後にいる中国の「太っ腹」な資金力と統治力には、ただ感心するばかりであった。



歴史の重みを感じさせる監獄跡の観光スポット「大館」

中環のマンダリン・オリエンタル香港に立ち寄って一息ついた後、一度ホテルへ帰着。少し休憩を挟んだ後、夕方は再び香港島へは戻らず、タクシーを利用して「古い香港の面影が色濃く残る」と言われる深水埗(シャムスイポー)へと足を延ばした。

なるほど、最新のガイドブックが謳う通り、街全体に漂う混沌とした雑然感、古びた高層ビルのベランダから何本も突き出た物干し竿に翻る洗濯物群、速度感ある露店や商店街の雰囲気は、私が 40 年以上前に初めて香港を訪れたときに体感したあの熱気にどこか似ていなくもなかった。しかし、その雑沓の中をテスラをはじめとする最新の電気自動車(EV)が音もなく滑らかに行き交う様子を見て、かつての「遠い過去の香港」はもうここには存在しないのだと思い知らされた。



古い香港の面影と近代的な高層ビル
が混在する深水埗の街並み

四日目の最終日は朝食後、ホテル前にある九龍公園を散歩した。街の真ん中でありながら豊かな木々に囲まれ、小規模な動物園まで併設されており、非常に気持ちの良い空間である。驚かされたのは、早朝から非常に多くの清掃担当者が熱心に働き、園内を塵一つないほど綺麗に整えている様子だった。翻って、「現在の東京や横浜に、これほど行き届いた美しい朝の風景があるだろうか」という疑問が頭をよぎり、胸中は何とも言えない複雑な思いで満たされた。この 4 日間の旅を通じて、私はそのようにして、あらゆる局面で「彼我(香港と日本)」を比較し続けていたことに気づく。

ここで少し数字を整理してみたい。香港の面積は約 1,050 平方キロメートルであり、これは東京都のおよそ二分の一、札幌市とほぼ同じ規模にすぎない。そこに暮らす人口は 734.61 万人(2020 年代統計)で、日本の愛知県や埼玉県と同程度である。すなわち、香港は面積・人口ともに東京都の半分ほどの規模なのだ。全体の人口密度は東京都とほぼ同等であるが、九龍の一部には東京 23 区を遥かに凌ぐ過密地域も存在する。このような単純な比較が統計学的に正しいかどうかは別として、数字の上では日本が大きく先行しているはずの差を頭では理解しつつも、実際にこの地に身を置くと、「東京、ひいては日本は、今や完全に香港に遅れをとっている」という強烈な印象をどうしても消し去ることができない。一体なぜなのだろうか。東京は、そして日本という国

は、かつての高度経済成長の成功体験に囚われ、常に世界のトップ集団にいることに甘んじ、慣れきってしまった結果、新たな技術や社会システムの摂取を怠ってきただけなのだろうか。

事実、街を行き交う EV 車の目につく割合を見ても、日本は確実に遅れをとっている。現在の東京では、香港のようにテスラ車が当たり前のように疾走する光景はまだ日常のものとは言えない（テスラ車が普及していること自体を近代化の絶対的な基準にすべきかは議論の余地があるが）。さらに、地盤や防災基準の違いがあるとはいえ、超高層建築の洗練された並び方やその密度も比ではない。道路の幅員や、新設された公共施設の圧倒的な規模感においても、もはや日本の都市は太打ちできていないように思える。マクロな経済指標の数字としては、いまだ東京や日本に及ばないはずの香港であるが、実際に走る車の新しさや施設の凄まじい規模を前にすると、こちらが完全に圧倒されてしまうのだ。

私は何か重大な勘違いをしているのだろうか。そう自問し、このように書き進めながらも、自分自身が抱いたこの「日本敗北」の印象が、何かの間違いであってほしいという可能性を完全には否定できずにいる。

なぜなら、街中で見かけた限りにおいて言えば、人々が一人ひとり身に纏っている衣服の洗練度や、特に若い世代のファッションセンスやスタイルなどは、東京や横浜の若者たちの方が遥かに優っていると感じられたからだ。しかし、その「見栄えの良さ」の裏側にある本質に目を向けたとき、暗澹たる思いが去来する。結局のところ、ほんの数年前に香港の若者たちが命懸けで見せたあの強烈な「反骨のエネルギー」は、中央政府の圧倒的な権力によって完全に制圧され、抑え込まれてしまった。香港の若者たちは、自らの手で自分たちの未来と居場所を創り出そうと、一時は死に物狂いで抵抗し、善戦した。しかし、残酷にも前世代の手によってその若き芽は摘み取られてしまったのである。

一方で、見栄えばかりが良く、小綺麗にまとまった東京の、そして日本の若者たちには、社会を揺るがすような精神のエネルギーの発露がいまだ訪れていない。容姿端麗で格好の良い彼らが、旧弊な社会に対して真に決起する日は、いまだ到来していないのだ。日本の若者は、1970 年代初頭まで続いた激動の時代を経て以降、文字通り国家や社会のシステムに制圧され、飼い慣らされたままの状態が続いているのではないか。いや、それどころか、あろうことか近年の世界的潮流としての保守化・右傾化の波にまんまと乗り、主体的思考を放棄したまま、アメリカ大統領にしなだれかかったり、公衆の前で軽薄に跳び跳ねたりするような女性首相（あるいは政治指導者）の姿を、熱狂的に絶賛し、支持しさえしている。そのような惨状を目の当たりにするにつけ、「彼らが覚醒するその日は、もう二度と来ないのではないか」という絶望的な予感が胸を締め付ける。いつまで待てば、この国の停滞は打破されるのか、その見当すらつかない。

しかし、それでも私は、いつか必ずその変革の時が来ると信じたい。日本の若者たちが、いつの日か旧世代の遺した歪んだ枠組みを完膚なきまでにぶち壊し、新しく先鋭的な取り組みを自らの力で実現してくれたなら、いま私が香港の地で体感し、打ちのめされている「彼我の差異」など、未来の笑い話に変わるはずだ。きっと、そうなると信じたい。香港の圧倒的なダイナミズムに圧倒されつつも、自国へのそんな儚い希望を必死に自分自身に言い聞かせながら、私は帰国の途についた。

補：本寄稿のバックナンバーは https://www.japa.fellowlink.jp/professional に掲載